

トマス・テイラーによるプロティノス受容について

—— *Em. III, 8 [30]* をめぐって ——

三宅浩史

序

トマス・テイラー (Thomas Taylor, 1758~1835) は、古代ギリシア哲学を産業革命下の英国において翻訳、および論文というかたちで紹介した人物である。テイラーの古代ギリシア哲学に対する深い理解は銘記すべきであるが、それは、新プラトン主義の体系を通してのものであった。彼は若い時期から数学への関心に誘われて古代ギリシアの知恵に触れ、アリストテレス、プラトンを学んでいった。それからまもなく、いわゆる古代ギリシア哲学を、ある意味で総括した人物と出会う。その人物がプロティノス (Plotinos, 205~270) である。そしてこの哲学がプロクロス (Proklos, ca. 410~485) によって集大成されることになる。テイラーはプロティノスとテキストにおいて出会い、『エネアデス』

における半数の論文(二七編)を英訳し、テイラー自身の注等を付けている。

テイラーは在世当時、英国におけるロマン派の詩人たちに、少なからぬ影響を与えた¹⁾。それゆえ、彼を通してプロティノスの思想が、詩人たちの詩作において有力な源泉のひとつとなり得た、ととらえることができる。したがって英国ロマン派の詩人たちが提出した作品の豊かさは、プロティノスの思想を通じてのものだともいえよう。それゆえわれわれの主要な関心は、テイラーがどのようにプロティノスを受容しているかにある。そのためには、プロティノスによる『エネアデス』の中から、テイラーが英訳する上で重要なと思われる論文を取り上げ、両者を比較しつつ、テイラー特有の受容が見られる箇所を考察することが肝要となる。今回は *Em. III, 8 [30]* 「自然、観照、および一者について」²⁾

のプロテイノスによる原文を読み進め、テイラーによる記述内容と比較検討するとともに、テイラーにおけるプロテイノス受容について考察してみたい。

— *Em. III, 8 [30]* 要約⁽³⁾

プロテイノスによるこの論文の中軸をなすのは、観照である。

それを通して実在となり、この世界の現象となるものともに観照である。この論文においては最下位の観照を感性界の自然の内に見て（第一節、第四節）、それからその上位にある魂の観照を、人間の行為の根本としてとらえ返し（第五節、第六節）、以上の諸節のまとめをしてから（第七節）、知性の観照を通して一者について説かれる（第八節、第一⁽⁴⁾節）。

第一節の冒頭でプロテイノスは新プラトン主義の体系における各位の存在のレベルという点では違いがあるが、すべての基本となる営みは観照であり、それを通して一切が作られていることを示す。それでは観照とは何か。特に万物の中で姿もなく、非ロゴス的な自然はどのように観照することによって、生きとし生けるものを作っていくのだろうか。自然にはそこに形成される素材がなければならぬが、自然は自ら動かすものでもある。蜜蠟を掘って形を作る人も、自らを動かすことによって表面を形作る。そこで第二節では、たとえば蜜蠟を掘る人が自身の技術を行使しようとするとき、目の前の蜜蠟に「とどまるもの」(11)「が力とし

てなければならぬ」とプロテイノスは述べる。ちょうどそのように自然物には素材の上にとどまっている形相が、形成作用という力としてあらわれてくる。つまり素材がロゴス化されて、自然物として生じるのである。こうした自然の形成作用の痕跡に、ロゴスをうかがうことができる。そこにあるのはロゴスの残骸であるが、その力が生成の世界を作っているのである。

第三節において、自然の形成作用はロゴスに基づいており、そこに作用し、自身のうちにとどまっているのである。自然は観照だということが示される。自然は最下位のロゴスだと言いうる。それに先立って、魂が存している。最下位のロゴスは観照から出たものであり、自然はロゴスにしたがって、自身の中のことについて考察する。自然はロゴスでもあり、生でもあり、制作力でもある。自然物が存在するということは、自然自身が作っているということであり、自然はロゴスとして、観照でもあり、観照されるものでもある。それゆえ自然の制作は観照である。それでは自然は何のために制作するのだろうか。第四節で自然は自身の沈黙を引き合いに出して、自身に先立つロゴスの大きさを説く。自然は自然の前にある魂が自己自身を観照することによって生じたのである。そして自然は観照し、自身になりながら自身の中にとどまり、そして観照されたものになっていくのである。自然の観照から生まれたものは弱いものだが、人間も自身の観照を通した行為によってロゴスの影を示すことになる。

第五節から、魂の観照が主題となる。魂は自身の上部に知性をとどめながら発出している。しかし魂の活動がその先のものとの後のもので異なるのだとすれば、行為から生じるものは観照から生じるものよりも弱くなる。魂の行為は、最も弱い観照である。それゆえ魂が観照することを通して、自然の観照が作られることになる。新プラトン主義の体系において、魂の営みにおける観照は知性における全き観照とは異なり、さまざまな種類をもつものとして自然界に現れる。そのようすを、「パイドロス」における駢者と二頭の馬が喩えとして示されている(94^a~95^b)。見ることを欲することによって欲したものとなっていくという仕方では、観照するものが観照されたものになっていくのである。そうした次第で、人間の行為は観照や観照されたものをめざしている。それでは行為がめざす観照を通して人間がとらえようとしているものは何か。またそれはどのように現れるのか。続く第六節を見てみよう。魂のなかで観照されたものは善としてとらえられる。それをめざして人間は外に向けて行為するのである。しかし、すると行為は観照にふたたび戻らなければならなくなる。人は魂のなかでロゴスを沈黙のうちにつかむ。これは「知る」ということだが、魂の中で知るものと知られるものが一になる。魂はロゴスこそ自身に固有のものだと悟る。しかしこのように悟ることができるのも、ロゴスが魂自身にとって欠けたものだったからである。観照という点で自然より完成している魂だが、知性ほど完全ではない。

そこで魂はいわば推論の旅に出る。そして魂の知性的部分に戻って観照をする。だが賢者の魂はつねに直知の段階に達しているのだ、そうした旅をする必要はない。彼は自身へ向かう視覚になっている。これは直知としての自覚の極みだともとらえることができる。

以上の内容から、一切は真実在としての万有の観照という営みの中にあるととらえることができる。第七節では第六節までの言説がまとめられている。魂に発する人間の行為も、形相や観照の成就を目的としている。しかし感性界では、そうしたロゴスが観照内容として示され始めなければ、行為はありえないこととなる。感性界でのロゴスは知性界のロゴスにとつては他のロゴスだが、観照を通して感性界で完成されるものにはそうした事情があるという当のそのことを、目下の言説でわれわれは現実に興起すべきなのである。観照の中に第一位のものがあつて、かつ万有はそれをめざしてロゴスにそつてすすむのである。つまり魂があるものを作るといふことは、形相を作ることであり、万物を想起で満たすことでもある。

第八節において、言説は知性へと進む。自然から魂へと上昇した観照は知性において、観照されたものと観照しているものとが一になる。両者は「実有」として「存在」と「知ること」が一になっている(96)。それはそれ自身で生きている観照である。知性から発するロゴスによって、植物的、感覚的、精神的な作用とな

る。第一の生も知性の作用であり、以下に続く各段階の生がある。異なる生があることを人は語るが、知性が生の全体であることを語ろうとはしない。それゆえここで、万有が観照の副産物であることを想起せねばならない。知性によって観照されたものも観照作用もともに生きており、一なのである。知性はいわば「酔いつぶれている者(98)」のように万有をとらえようと已を開いてしまい、二となり、万有を持ってしまったともいえる。知性の部分には、一切であり万有であるものが含まれている。また、知性は無限であり、劣悪なものを持たない。

知性は実在であり、完全なものではあるが、それに先立つものがある。第九節ではそうした一者が説かれる。知性は多であり数でもある。しかしその根源は「一」である。知性は万有の発出における現実態(energeia)である。つまり知性は自身を直知することにより、同時に直知されるものとなり、実在となる。それゆえ、いわば知性であり実在となるものが、その根源を見誤らせているとみなしうる。なぜなら根源は直知しえないからである。それでは知を超えたところにある善であり、もっとも単純なものと目されるものを、どのようにとらえればよいのだろうか。あらゆるものは一者を分有している。その分有しているところに一者はあることになる。そのようすが、荒野で「響き(99)」をとらえる人間のありように、喩えて示されている。この喩えは示唆的なので、

小論の結語で触れることにする。一者は、そこから「知る」とか「存在する」ということが示される万有以前に、その根源としてとらえられるべきなのだと思われよう。第一〇節ではさらに一者に焦点が当てられていく。一者とは何か。万有の可能的な力(dynamis)である。一者は、万有が発出していく根源としてとどまるものである。あるいは巨大な樹木の根として、木の全体に生を送りながら、自身はとどまっているというように喩えることもできよう。生を多として認めながら、それ自身は一なのである。それは万有の中へと分割されることのない、不可分なものである。もはや万有としての知や実在や生を超えたものである。存在を取り去った、もはや知識をも超えた根源的な驚きの中で、人は一者をいわずとらえる。

最終の第一一節において、一者はいかなるものも必要とせず、自足しているので、いかなるものでもないことが説かれる。知性は視覚であるとともに現に活動している能力でもある。知性は視覚がとらえる形相であり、現に働く素材とも受け取りえるので、したがって二である。知性を充足させるのが一者なのであり、一者は何も欠いてはいない。善のアイデアも、一者が知性に作らせるといえる。知性は自身の上に一者の痕跡を見て、善一者をいわずとらえ返すのである。壮麗で美しい知性界を見た人は、「驚き(99)」にとらえられる。知性という少年の親は知性や充足の前にある。それが一者なのである。

二 テイラーにおける *Enn. III, 8* [30] の受容について

先に掲げた『プロティノス五書』における序文の該当箇所においてテイラーは、このプロティノスによる論文 *Enn. III, 8* は「神性の諸観念に富み、プラトン哲学のもっとも深奥な諸学説のいくつかを含んでいる」と述べる一方で、「私はただ魂と感性界の力の間にある自然に関して述べておこう」とも示している。これはどうしてだろうか。一におけるテキスト要約の冒頭でも述べたように、*Enn. III, 8* が論述される中軸となるのは、観照である。自然のロコス（形成作用）は、最終段階の観照（第二節三一行目）による。まさにそれを通して感性界が形成され、われわれ人間の身体の各器官、血液等の組成や骨の一片に及ぶまで作り上げ、そしてそれらを統一的に生きるものとして動かしているのも自然である。それは宇宙靈魂から至るロコスをもとに、自然自身を観照して得られるものである。そして宇宙靈魂は、自身に先立つ知性からロコスを受け取っている。そうした知性は、一者のロコスでもある。観照が各段階での形成の発端から生じ、その作用がロコスとして働く、と改めてとらえることができよう。*Enn. III, 8* では自然についてだけでなく、魂、知性、一者に ついても、観照を基軸として述べられている。それゆえテイラーは、感性界に住むわれわれにもっともなじみ深い作用である自然

をモデルとして、その観照という事態が各位の上の段階にある者のロコスを受け取る形でなされることを通して、新プラトン主義の体系が理解されていく方途へと読者を導いているのだと受け取ることができよう。

それではテイラーは自然をいかなるものとしてとらえているのだろうか。「自然は神性と思なされた女神だが、神性という語の第一義にしたがっているわけではない」とテイラーは語る。自然の作用は先立つ魂（宇宙靈魂）のロコスである。したがってより厳密な意味で、自然は神ではない。以上はプロクロスの言説に基づいている。しかしテイラーは該当文書の末尾で、自然は自然界にあるものが「生成し、栄養を摂取し、繁殖するあらゆるものに至る原因である」とアリストテレス的に述べる。そして自然は「想像 (phantasy) を欠いている」と示している。想像とはここでは再生復元された感覚像を提示する能力のことだと受け止めうる。先述したように、われわれの身体の諸機能も自然の作用に沿って維持されている。しかし自然は想像を欠いている。それでは想像するのは何か。それは魂である。ここでテイラーは想像という事態を解して、ある意味で自然と魂の区別を行っているのとらえることができる。

当該のテイラーによる序文の末尾で、「想像は非理性的な (irrational) 生の頂点である」旨が告げられている。これはアリストテレスの魂論 (*De Anima, 433b29-30*) にしたがった記述であ

ると受け取れよう。¹⁵⁾非理性的な生も想像に与っている。動物も感
覚しうるからである。テイラーの文面からうかがえば、自然は宇
宙靈魂のロゴスなのだから、この世界に配分される受動的なもの
である。そうした対比から見れば、「非理性的な生の頂点である
想像は、配分もされない非受動的である」というテイラーの記
述にもうなずくことができよう。なぜなら想像は、動物の魂も含
めて、魂自身に備わった能力だからということになる。

結 語

以上のように、一たおいてわれわれは今回考察した *Em. III, 8 [30]* のテキスト内容を要約し、観照という事態が基軸に論じられていたようすを眺めた。次に二においてテイラーは観照の最後の段階である自然の作用を中心に、このテキストを受容している旨を考察した。それによれば、テイラーはプロクロスのテキストに影響を受けつつも、自然と魂の違いを想像に求める局面において、アリストテレスの魂論に沿って考察しているさまがうかがえた。

Em. III, 8 [30] のテーマは、まず観照に関するところであった。観照を根源的に行うのは知性であり、それは自己自身を見ることである。しかし根源となる一者は、もはや知性の機能として受け取れうる「視覚」を通してはとらえられない。そこで一者を「響き」として聴覚的にとらえるところから、*Em. III, 8* の第九節

で示唆されている。このことは注目に値しよう。なぜならテイラーも「プロティノス五哲」における他の論文への序文で、この事態に通じることをほのめかしている¹⁶⁾と受け取れうるからである。それゆえ世界の根源からの「響き」をとらえる視野は、われわれの今後の考察に資するものとなるように思える。またこうした視野は、プロティノスが示す世界観を、ある意味で「音楽的なもの」としてとらえることにつながることもいえよう。

(1) Cathleen Raine and George Mills Harper (ed.), *Thomas Taylor The Platonist*, Princeton: Princeton University Press, 1969.

(2) 坂本が、Paul Henry, Hans-Rudolf Schwyzer (ed.), *PLOTINI Opera*, Tomus I, *Enneades I-III*, Clarendon: Oxford University Press, 1964, pp. 362-377. 坂本のテイラーの英訳は Plotinus, Taylor, Thomas(trs.), *Collected Writings of Plotinus*, Frome: The Prometheus Trust, 1994, pp. 55-71 & 123-34. ノーマーノ・マリアンニが Marsilio Ficino (tr.), *Plotini Enneades*, F. Creuzer & G. H. Moser (ed.), Paris: Institutus Francici Typographis, 1896, pp. 181-189, を用じた。また R. Harder, Hamburg: Felix Meiner Verlag, 1956-1971. 坂本の E. Bréhier, Paris: Société d'édition Les Belles Lettres, 1954-1960, も随所で参考にした。邦訳は田中美知太郎「水地宗明」田之頭安彦訳『プロティノス全集』(中央公論社、一九六七-一九八七)を使用した。

(3) カッコ内の数字は原典において該当する節の行数を示す。

- (4) 田中、前掲書、第二卷四二〇頁～四二二頁参照。
- (5) Plotinus, Taylor, Thomas (trs.), *op.cit.*, p. 67.
- (6) *ibid.*, p. 67.
- (7) 田中、前掲書、第二卷四三七頁、注(5)参照。
- (8) テイラーによるプロティノス受容には、プロクロスが少なからぬ影響を与えている。そのことは、『プロティノス五書』へのテイラーによる本文の文面からも明らかである (Plotinus, Taylor, Thomas (trs.), *op.cit.*, p.55)。上記の自注欄でもテイラーの「プロクロスの影響が見られる」。Proclus, Taylor, Thomas (trs.), *The Theology of Plato, Frome : The Prometheus Trust*, 1995, pp. 582～583 参照。テイラーへのプロクロスの影響関係について「オキダ」今後の課題とする。
- (9) Plotinus, Taylor (trs.), *op.cit.*, p.67.
- (10) Proclus, Taylor (trs.), p.583.
- (11) *ibid.*, p.68.
- (12) *ibid.*, p.68.
- (13) 水地宗明『プリストテレス「チ・アニア」注解』(泉洋書房、二〇〇一) 三三四頁参照。
- (14) *ibid.*, p.68.
- (15) 水地、前掲書一三〇頁参照。
- (16) Plotinus, Taylor (trs.), *op.cit.*, p.68.
- (17) *ibid.*, p.68.
- (18) 「『神学』」を記す第一二頁参照。
- (19) Enn. I, 4, [46] くの本文参照。Plotinus, Taylor, Thomas (trs.), *op.cit.*, p.62.

(みやけ・ひろし、哲学、金沢大学非常勤講師)